

さくらを見よう、知ろう、育てよう さくらの一年を見てみよう ～さくらを守る四季ごよみ～

春 花付きを見てみよう

前年に伸びたソメイヨシノの枝に付く蕾から咲く花の数を調べ、元気度を判断します。写真の場合①～⑥の1つあたりにつく蕾の平均を調べます。



- 😊 6個以上
…とても元気
- 🙂 4～5個
…元気
- 😞 3個以下
…やや弱っている

てんぐ巣病を見つけよう

てんぐ巣病は、伝染病で罹病すると小枝が箒状になり、放置すると全体に蔓延し、枯らしてしまう恐ろしい病気です。桜の開花期に葉が展葉するので、春は見つけやすいです。



開花中に葉をつける
てんぐ巣病のソメイヨシノ

夏 葉っぱの大きさを見てみよう

樹勢が良い桜は、葉の大きさも小さくなる傾向があります。身近な桜の葉の大きさを見てみましょう。

木につく虫を探してみよう

桜の木には色々な昆虫が集まります。どこにどんな虫がいるか見てみましょう。



モンクロシャチホコ

幹に付くきのこを探してみよう

幹に付くキノコで代表的なものにベッコウタケやコフキササルノコシカケがあります。どちらも木を腐らせ幹や根の強度を低下させるので、枝折れや倒木の危険性が高くなります。



コフキササルノコシカケ

秋 葉っぱの紅葉を見てみよう

日立市内では、ソメイヨシノは11月頃に落葉します。健康な桜ほど赤く紅葉します。樹勢の衰えた桜は、8月から葉が黄変して落葉することがあり、落葉の時期も木の元気度を知るバロメーターのひとつになります。

地面に生えるきのこを見てみよう

夏の終わりから秋の初めにかけて、根元にナラタケやナラタケモドキというキノコが発生することがあります。これらは、桜を枯らしてしまうことがある要注意なキノコです。



ナラタケモドキ

冬 葉が落ちた枝を見てみよう

落葉すると樹形がよく分かるようになります。枝の先端がスッと伸びていれば元気な証拠です。一方、先端の伸びが悪いと湾曲して垂れさがり気味になります。このような枝が多い場合は、施肥をするなどして元気にさせる必要があります。また、枝が混み合ったところも分かるようになるので、この様なところは枝の整理をしましょう。残した枝は、花付きがよくなります。それぞれの枝にまんべんなく日が当たるのが理想の樹形です。



生育が良好な枝



生育の悪い枝

さくらのためにできること 施肥・根元の踏圧防止・剪定

桜の性質

桜は日当たりが良く、土壌の排水性が良好で栄養分の多い土壌で元気に育ちます。

施肥

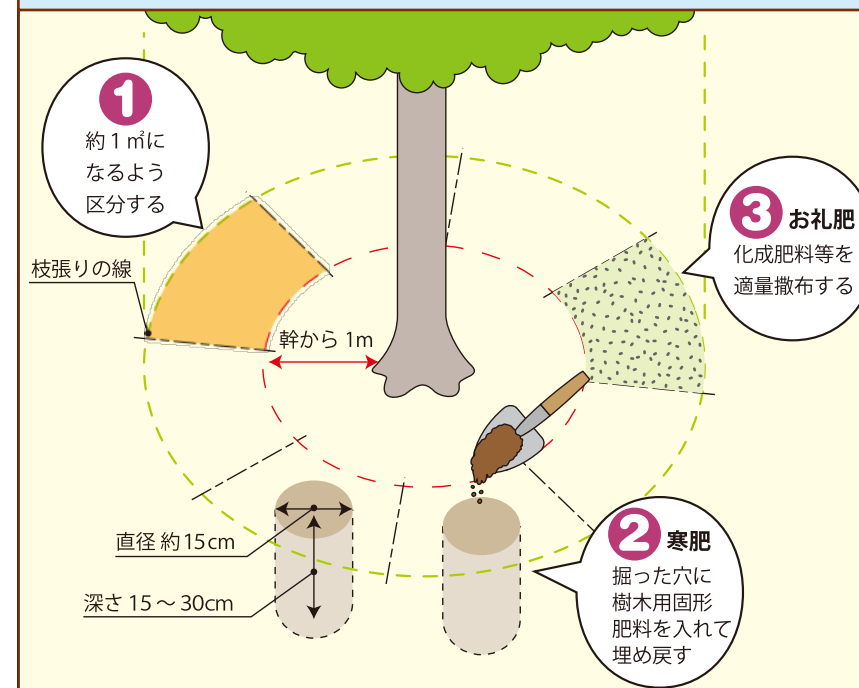
桜は肥料を好む樹木です。施肥は、葉が落葉した11月～2月にかけて行う寒肥と花が咲き終わった直後の5月頃に行うお礼肥の2種類の方法があります。一般的には、主に寒肥を行い、手間をかけられるようであればお礼肥も行いましょう。

根元の踏圧防止

樹勢が衰退する原因の一つに根元の土の踏圧があります。桜の根は浅く広く張る性質なので、土の表面が硬く締まってしまうと土に水が染み込み難くなり、通気性も悪くなることで桜の樹勢を弱めてしまいます。根元にはできるだけ立ち入らないほうが良いのですが、お花見では根元まで人が入ることがあり土を固めてしまいます。その様な場合は養分の補給を兼ねた寒肥(右図)を施します。そうすることで硬く締まった土の改善にも効果があります。

施肥の方法

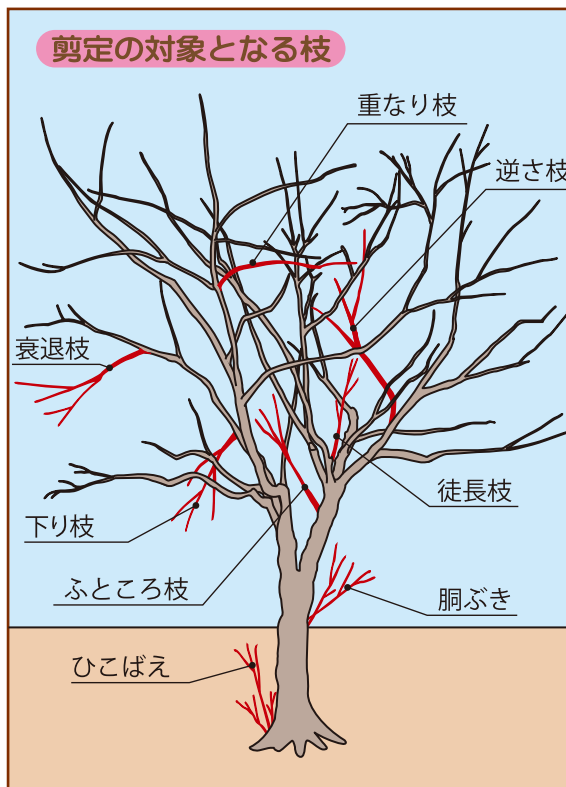
- 1 木の幹から1m離れた円と枝張りの円との間の面積が1㎡になるように、地面を区分します。
- 2 寒肥の場合、下図のように1区分(1㎡)あたり1つ穴を掘り、樹木用の固形肥料等を規定量入れ、埋め戻します。
- 3 お礼肥の場合には1区分(1㎡)あたり10g程度の化成肥料を地面に撒きます。



剪定

「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」ということわざがありますが、実際には右図に示したような枝は、桜の生育にとって必要のないものであり、放置しておくとも本来必要な枝の成長を妨げたり樹形を乱すなどの悪影響をもたらします。

剪定は木への負担を最小限にするため、剪定する枝が細いうちに実施します。時期は、落葉後の11月～2月頃に行います。切除後の切り口には市販の樹木用の癒合剤を塗布しましょう。また、剪定を行った年は必ず施肥をセットで行います。



剪定の位置

適切な位置で枝を切除することで、切り口が塞がることを促します。幹の組織をなるべく傷つけないように注意し、枝の組織のみを切除するようにしましょう。

てんぐ巣病に罹った枝の除去

てんぐ巣病はコブから下の枝の付け根を切ります。コブから先が病気に罹った枝は、放置しておくとも病気が蔓延してしまいます。治療薬もなく、展葉と同時に胞子が飛散するため、葉が出る前に切除します。